

講演会『「村上海賊」と宮島』を聴いて

2026.5.24 作成 森

2月24日に串戸市民センターで首記題名の講演会が開催されたので、興味本位で参加してきました。話についていけず、理解が追いついていけない所が多々あり、いつもの通り消化不良状態でした。誤解した部分もあるかと思いますが、脈絡なく一部だけご紹介します。

開催日時：2月24日（火）13時30分～15時

開催場所：串戸市民センター（参加者20～30人くらい）

演 題：「村上海賊」と宮島

講 師：県立広島大学 名誉教授 秋山 信隆 氏

I. 講演内容

1. はじめに

- ・鎌倉時代の「海賊」は、船を襲撃して生命や財産を奪う海上犯罪者集団で、謀反、殺害、夜討、強盗、山賊と並ぶ重大な犯罪行為であった。南北朝・室町時代以降、「海賊」という言葉が、航海の安全を保証する見返りとして「警固料」を取る「警固衆」という意味で使用されるようになった。
- ・戦国時代の史料には「村上海賊」という用例は見つかっておらず、能島（野島）・来島・因島をそれぞれ本拠地とする三島の村上氏のことを、戦国時代の安芸国の人々は「沖家（興家）」と呼んでいた。この講演では、三島全体をいうときは村上氏又は沖家、個別にいうときは能島、来島、因島と表現する。
- ・【補足】三島の村上家は、もともとは一つの家であったという。起源は、平安時代末期に活躍した村上為国の弟・村上定国が保元の乱後に淡路島を経由して塩飽諸島に居を構え、平治の乱後に越智大島（伊予大島）に移し、伊予村上氏の祖となったとされる。その後、三島の村上氏は同族意識を持ちながらも、それぞれ独自に活動を行った。

2. 大内氏時代の村上氏と宮島 一天文10年（1541）代前後—

- ・村上氏の姿が宮島で史料的に確認できるようになるのは天文10年（1541）からである。正月12日、大内氏と手を切った友田興藤は「興家三家ノ警固」20～30艘を呼び下し、島内にいた大内衆を追放し、彼らが残した兵糧米を「警固衆」に分配した。ところが、15日、黒川隆尚率いる大内氏警固船200～300艘が宮島に押し寄せ、野島・呉島（来島）の30艘が応戦したが、大内氏方に敗れ、西に逃走した。
- ・天文9年（1540）9月から翌年3月にかけて、小原隆言が指揮する大内警固衆が伊予の忽那島・中島（松山市）などを攻撃した。大内氏と反大内氏の陣営の対立の中で芸予諸島の海上勢力を自陣営に引き入れようとする動きがあり、反大内氏の陣営についたとみなされた忽那諸島の勢力を大内氏が攻撃したものと思われる。

- 天文10年（1541）6月18日から7月26日にかけて大内氏警固衆の白井縫殿助が三島・甘崎・岡村・能島・因島を攻撃している。三島村上氏が大内氏に反旗を翻した友田興藤を援助したことに対する報復であろう。しかし、天文11年6月から大内義隆の出雲進攻（尼子軍攻撃）にともない警固衆も出雲に進出し、天文12年5月7日に大内軍総退却・敗走まで警固衆は中海方面に展開していたと考えられる。
- 大内氏警固衆の伊予における活動が活発化するのには天文15年（1546）からで、天文16年には、厳島社神主佐伯景教（大内家臣・杉高真が改名）が能島に在城するために宮島から水夫を出す代わりに金をだせとの要求があり、問題になっている。（大島居建設中で人を出せないと言ったら。）
- 神主佐伯景教が能島に在城していることは、能島が大内氏に降伏したことを示す。大内氏警固衆の攻撃を受けた能島・来島・因島はそろって降伏していたと考えられる。
- 厳島社が大内氏に対して、法会の時に参詣する予州衆の船に「諸浦警固衆」が違乱するため、参詣が途絶えて迷惑であると訴えた。警固衆の白井氏は、警固料を課す行為が「違乱」と訴えられたことに対して、警固米を課すことは「有様儀」であり、それによって参詣の船が滞るとは思えないと反論している。

3. 陶氏時代の村上氏と宮島 一天文20年～24年一

- 厳島合戦における三島村上氏の動向については、毛利方として来援したとするのが、通説的な理解であった。しかし、天文23年（1554）6月頃の書状によると「野嶋」（能島）から使者が津和野を攻めていた陶の陣中に到着し、備後・安芸の情勢を陶晴賢に報告している。能島村上氏は、陶氏と連携していたのである。
- 能島村上氏が、毛利氏に対する軍事的な協力をはじめて行うのは、永禄4年（1561）北九州での大友氏との戦争の時である。

4. 天正10年「沖家騒動」と宮島

- 天正10年（1582）4月、羽柴秀吉は、備中高松への攻撃を開始した。毛利方警固衆の村上氏への切り崩し工作は、天正9年12月から来島村上氏との交渉が始まり、翌年正月には、村上氏が離反して厳島を攻撃するという噂が広まり、対岸に島民が避難する騒ぎとなっている。また、3月末には厳島の宝蔵の宝物を対岸の桜尾城に移すなどの動きが始まっている。
- この頃になると、来島村上氏の離反は明白となり、焦点は能島・因島村上氏の動向となった。小早川隆景や能美宗勝による説得が続き、4月中旬には来島を除く能島・因島村上氏は毛利方に留まり、宮島（厳島社）は安堵感が広まった。（野島の軍事力が一番強かった。）
- 【補足】天正16年（1588）に天下を取った豊臣秀吉が海賊禁止令を出すと、各地の海賊は大名の家臣となるか農漁民化するなどして海賊から転向を余儀なくされた。

以上